

2021 年 1 月 17 日（日）「今を生きる知恵」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 7:7-10

- 7 虐げられれば知恵ある者でさえ愚かになり、賄賂をもらえば理性を失う。
- 8 事の終わりは始まりにまさる。気の長さは気位の高さにまさる。
- 9 気がせいいていらだってはならない。いらだちは愚かな者の胸に宿るものだから。
- 10「昔が今より良かったのはなぜか」と言うてはならない。知恵にふさわしい問いではないのだから。

《新改訳 2017》伝道者の書 7:7-10

- 7 虐げは知恵のある者を狂わせ、賄賂は心を滅ぼす。
- 8 事の終わりは、その始まりにまさり、忍耐は、うぬぼれにまさる。
- 9 軽々しく心を苛立たせてはならない。苛立ちは愚かな者の胸にとどまるから。
- 10「どうして、昔のほうが今より良かったのか」と言うてはならない。このような問いは、知恵によるのではない。

【序論】

コヘレトの言葉は「知恵文学」と呼ばれるように、読者に知恵ある生き方を教えています。人は失敗から多くのことを学びますが、それらの失敗は「知恵の欠如」に起因することが少なくありません。コヘレトは様々な格言を通して「知恵ある生き方」を教えていますが、そこには常に底流を流れる思想があります。第一に、自分の死を見つめるということ。第二に、現実を見つめるということです。これらは密接に関わっており、第一の土台の上に第二がある。死を見つめるところに現在の生き方が決定されていく。今日は「知恵を滅ぼすもの」を中心テーマとし、以下のポイントで学んでまいります。

①恐喝と賄賂（7 節）

②終わりを待たぬ判断（8～9 節）

③懐古主義（10 節）

【本論】

本論に入る前に前回の箇所を振り返りますと、「知恵ある者」「愚かな者」というテーマが 7:4 から出てきていたのを思い出していただければと思います。今日の箇所はその流れの上にあります。

## 本論 1. 恐喝と賄賂（7 節）

**虐げられれば知恵ある者でさえ愚かになり、賄賂をもらえば理性を失う。（7:7）**

ここには「**虐げ**」と「**賄賂**」という二つの事柄が出てきます。いずれも知恵を滅ぼすものとして呈示されている。

「**虐げ**」（אָרשעק／オーシェク）という言葉は「恐喝」「危害」などとも訳すことができますが、本節全体に金銭的な臭いが漂っているところからして、「恐喝」を選択すると一貫性が出ます。脅されて知恵ある判断ができなくなってしまうことを言っているのでしょう。ここには恐怖心が背後にあり、正しいことが何であるか内心分かっていながら、行動に移せないことを言い表します。恥ずかしい話ですが、私は小学生の頃、クラスのカギ大将に脅されて、毎日数百円持ってくるように言われていました。私はある弱みを握られていたのです。私はその弱みが明らかにされることを恐れて逆らうことができず、泣く泣く家のお金を盗んでは渡していました。しかし、ここにはただ罪に罪を積み重ねる「愚かさ」があっただけです。この恐喝と罪の連鎖は、私が勇気を出してカギ大将と闘うまで続きました。闘いの朝、私は祈って力を得たことを覚えています。

「**賄賂**」（מַתָּנָה／マターナー）という言葉そのものには本来悪い意味はなく、「贈り物」（ギフト）と訳せばよいものです。しかし、これを文脈で捉え、人の「**心を滅ぼす**」（新改訳 2017 は直訳）ものであるとするならば、「賄賂」が適でしょう。賄賂は「口止め料」として支払われることもあれば、希望を聞いてくれたことへの見返りに支払われることもあります。政治の世界も賄賂によって真実が歪められていることを国民は知っているでしょう。お金の力で語るべきことが語られず、裁きが曲げられてしまう。

このように、7 節の前半と後半は「お金」という事柄によって一貫しています。お金は使い方を間違えると、人の知恵を弱め、行動を誤らせるものとなる。これは聖書の多くの箇所が立証していることです。

**金持ちになろうとする者は、誘惑、罠、無分別で有害なさまざまな欲望に陥ります。その欲望が人を破滅と滅亡へと突き落とすのです。金銭の欲が諸悪の根源だからです。金銭を追い求めたために、信仰から迷い出て、さまざまな苦痛でわが身を刺し貫いた者たちもいます。（1 テモテ 6:9-10）**

## 本論 2. 終わりを待たぬ判断（8～9 節）

**事の終わりは始まりにまさる。気の長さは気位の高さにまさる。（7:8）**

コヘレトが事の始まりよりも終わりを奨励するのは、今回が初めてではありません。

7:1b にも「死ぬ日は生まれる日にまさる」とありましたように、ここでもどことなく「死」の雰囲気が漂っています。ただ、ここではより広い意味で捉えることができそうです。物事は出だしは好調であっても、途中で厄介な問題に直面したり、最後は崩壊してしまうこともあります。すばらしい志で始められたことも、当事者の罪によって台無しになることもあります。もちろん、その反対も然り。出だしは不調であっても、あるいは中盤がゴチャゴチャとしても、見事に建て直されることもあります。人の人生も同様で、歴史に名を残すような事業を遂げた人も、残念な最期を迎えることがある。反対に、試練に試練の人生を歩みながらも、祝福に満ちた最期を迎える人もいます。このように、物事は終わってみるまで分からないものです。しかし、世の中はいとも容易く炎上し、冷静な判断ができていないように見受けられます。物事の真実がすべて明らかになっていない段階で、簡単に評価を下してしまうことが多いのです。

8 節後半を正確に訳すと、「忍耐強い霊は高い霊にまさる」となります。原文を見ると、「霊」を意味する「רוח／ルアハ」が使われていることが分かる。NKJV では「and the patient in spirit is better than the proud in spirit」と訳されています。「高い」「proud」(גָּדוֹל／ガーヴァー)と訳された言葉には「高慢な」という意味もあり、おそらくここではそのニュアンスが強いでしょう。急いで物事を判断するところには、謙虚さの欠如があると思われます。不十分な知識によって裁きを行なうよりも、物事の真相が明らかになるまで忍耐を持って待つことをコヘレトは勧めているのです。

**気がせいていらだってはならない。いらだちは愚かな者の胸に宿るものだから。(7:9)**

前半を直訳すると、「霊において怒るのに急いではない」となります。これも 8 節からの流れで読むならば、十分な判断材料が揃っていない段階で怒ると、後で恥を見ることになるかもしれないということが言われているようです。表に出てきているのは問題のほんの一部だということを、私たちは常に認識する必要があります。人が誰かを訴えるとき、自分が悪いとはまず言いません。近年、SNS で敵対者を公開処刑するケースが増えていますが、主イエスの教えによるならば、まずは一対一で話し合うことから始めるべきでしょう。それは、相手に悔い改めの機会を与えるためであり、いきなり問題が公にされてしまうとその人の人生そのものを壊してしまう危険性があるからです。

**きょうだいがあなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところでとがめなさい。言うことを聞き入れたら、きょうだいを得たことになる。聞き入れなければ、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。すべてのことが、二人または三人の人の証言によって確定されるようになるためである。それでも聞き入れなければ、教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人か徴税人と同様に見なしなさい。**

(マタイ 18:15-17)

9節後半で言われている「**いらだちは愚かな者の胸に宿る**」という表現は、根深い怒りをいつまでも心の中に溜め込み続けることを表しているでしょう。誰しも恨みを抱く経験はあるもので、これを解決することは実際難しいところがあります。傷ついた心はそう簡単には癒されないのを誰もが知っているはずです。私たちの怒りを根本から癒すことができるのは神以外にはおられません。神の摂理を知ることなくして、人は自分の人生に起きた不可解な事件を解決することはできないのです。自分が経験したひどい出来事が、神の良いご計画が実現するために必要であったという信仰に至ることが、唯一の解決の道ではないでしょうか。その良い御業を見ることができるよう、あるいはもう既にそれが起きているのであれば、それに対して目が開かれるように祈っていくことができるでしょう。

### 本論 3. 懐古主義 (10 節)

**「昔が今より良かったのはなぜか」と言ってはならない。知恵にふさわしい問いではないのだから。(7:10)**

この格言は面白いですね。「昔の方が良かった」という言葉は時折耳にすることがあります。私の最も古い記憶では、父方の祖父が我が家に来たときに、夕食ですき焼きを食べましたが、生卵の黄身の色が薄いのを見て「昔の卵はもっと色が濃かった」と呟っていたことです。子どもながらに、祖父の心にある「昔の方が良かった」という意識が何となく読み取れたものです。斯く言う私も、息子がやっているテレビゲームが難しすぎて付いていけないときに、心の中で「俺の時代のゲームの方がシンプルで良かった」とぼやいている自分に気づき、赤面したりもします。

このような小さな話ばかりではなく、コヘレトの念頭には、自分が生きている時代ではなく別の時代を思い焦がれて目の前の問題に立ち向かおうとしない人々への警告があります。どんなに過去を礼賛しても、現在の問題は少しも解決しないからです。そして、そのような懐古主義的な言葉は、まさに現在を生きている人々の耳に愚かに聞こえてしまうでしょう。「この人は時代に付いて来られていない」「もう過ぎ去った過去を遠い目で見つめて物思いに耽っている」と。

もちろん、コヘレトは過去を見るなど言っているわけではありません。過去の失敗から学ばなくては、同じ過ちを繰り返すでしょう。しかし、過去から学んだことを基盤として、今自分はどう生きていかなくてはならないかを考えることこそ重要なのです。時代を見据えるコヘレトの目はシビアです。彼は、過去も現在も未来もすべては同じだと結論づけている。

- ・ すでにあったことはこれからもあり、すでに行われたことはこれから行われる。太陽の下、新しいことは何一つない。(1:9)
- ・ 今あることはすでにあった。これから起こることもすでにあった。(3:15)

## 【結論】

今日は「知恵を滅ぼすもの」を三つのポイントで見えてまいりました。

- ①恐喝と賄賂（7 節）
- ②終わりを待たぬ判断（8～9 節）
- ③懐古主義（10 節）

自分の死の日を見つめるということは、未来を見据えることを意味します。しかし、その決定的な日から目を離さずに生きることは、現在の私たちの生き方を厳格に決定づけます。それは、過去を懐古して現実逃避することでもなければ、未来を諦めてしまうことでもありません。今をどう生きるか。神の摂理の下にある人生であることを忘れないようにしたい。どんなに複雑な人生であっても、必ず最善の結果に到達させてくださる神を信じ、忍耐を持って生きることがコヘレトの教える「今を生きる知恵」なのです。

## 【祈り】

知恵の源なる神よ。人はあなたと結びついて生きていたとき、何事をなすにも神から伝達される完全な知恵と知識によって正しく物事を判断することができました。しかし、罪は人を神から引き離し、すべてにおいて盲目とさせてしまいました。そのような闇の中に生まれてきた私たちですが、キリストの贖いにあずかり、神に結びつく者としていただきました。主イエスの教えに聞き従って生きていきたいと思えます。自分の死をしっかりと見つめ、現実から目を逸らさずに、過去から学びながら歩み続けることができますように。しっかりと地に足の着いた一生を送ることができるよう、片時も離さず私たちを導いてください。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人を金銭の罠から守り、知恵に生きる道に置き続け給う、父なる神の愛、

苛立つ心を鎮め、神の時に忍耐をもって待たせ給う、主イエス・キリストの恵み、

過去から学び、終わりの日から目を離さず、現実をしかと見つめた一生を歩ませ給う、

聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。